

メッセージアウトライン ローマ15：22～29「伝道と奉仕」

[22-24]「そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりました。また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので……」

「幾度も妨げられた」とは誰かがパウロの伝道を妨害したというのではなく、エルサレムから始まってイルリコに至るまでの広い地域で福音宣教に励んでいた(19)、今に至るまであなたがたの所、ローマに行くことができなかつたという意味。しかし、今やパウロはこの地方における働きは十分に果たしたので、次に長年の夢であったイスパニヤ伝道とローマ訪問を実現しようとしているのである。「イスパニヤ」とは今日のスペインのことで当時は西の地の果てと考えられていた。なぜローマに立ち寄るかといえば、「しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られてそこへ行きたい」(24)と望んでいるからである。

[25-26]しかし、今は彼は西ではなく東へ、エルサレムへと進まなければならなかつた。その理由はエルサレムの貧しい聖徒たちに奉仕するためであり、マケドニヤやアカヤ地方の教会は喜んで彼らのために醸金することにしたからである。「醸金」とは金銭を出し合うこと。エルサレム教会はあのステパノの殉教以来の激しい迫害により多くのクリスチャンが苦しい生活を強いられていた。パウロ自身も貧しい人々を顧みることについては熱心に励む人であった。それゆえ、彼は今回、自分自身の伝道計画は後回しにして、まずエルサレム教会に経済的援助をすることを第一としたのである。

[27]「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです」

「霊的なこと」とはユダヤ民族の宗教的特権とキリストの福音による救いのこと。パウロはローマ11:17以下で野生種のオリーブ（異邦人）と栽培種のオリーブ（ユダヤ人）のたとえをもって、そのことを教えている。ユダヤ人に対するすべての霊的祝福が今、異邦人に注がれているのである。それゆえ、異邦人は霊的なことではもらいものをしてるので、今度はそれにこたえて、物質的な物、つまり経済的な援助をもって奉仕すべきだというのである。→ヤコブ2:14～17 他の兄弟たち、特に困難や貧しさの中にある人々に対する奉仕は神に対する奉仕と本質的に同じ。→マタイ25:31～40

[28-29]以上のような理由からパウロは各地の教会から集められた献金を携えて今、エルサレムに行こうとしている。そしてそれをエルサレム教会に渡した後で、「あなたがたのところ」つまりローマを通してイスパニヤに行くことにしている。そしてローマに行く時は「キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています」と言う。

私たちも自分の計画だけを優先させるのではなく、今何が神のみこころであり、何を第一になすべきかをよく考えて、その方向に進まなければならない。苦しみや困難の中にある兄弟姉妹たちへの奉仕は主なる神への奉仕であることを覚えたい。